

五月五日とあやめ草

北 山 円 正

一

十世紀末期の宮廷を中心とした人々の生活や心の内を綴った『枕草子』は、五月五日の行事を優美な催しとしてことのほか尊んでいる。

節は、五月にしく月はなし。菖蒲、よもぎなどの香りあひたる、いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて、いひ知らぬ民の住みかまで、いかで我がもとに繋く葺かんと葺きわたしたる、なほいとめづらし。いつかはこと折りにさはしたりし。……（節は）

五月の節のあやめの蔵人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを、領布、裙帯などして、薬玉、親王たち上達部の立ち並みたまへるに奉れる、いみじうなまめかし。……（なまめかしきもの）

五月こそ、世に知らずなまめかしきものなりけれ。されど、

この世に絶えにたることなめれば、いと口惜し。昔語りに人の言ふを聞き、思ひ合はするに、げにいかなりけん。……（見物は）

この日の模様を繰り返し描き、あやめ草やよもぎの芳香、あやめ草を屋根に葺くのを賞美し、天皇から親王・上達部らに薬玉をたまわる模様を優美と捉えている。暑さと湿気が苦痛となる時期ではあるが、それには全く触れず、みやびな行事が繰り上げられることに喜びを感じており、「節は、五月にしくはなし」と言い切る。王朝人にいかに浸透し、親しまれていたかがよく理解できよう。⁽²⁾

ただ、右の「見物は」の段にあるとおり、清少納言が宮廷で暮らしていた頃、この日の行事である五月の節会はずでに停廃となっていた。

右大臣参^ニ仗座、停^ニ五月五日節。依^レ先皇忌月也。正月十六日踏歌、十七日射礼、九月九日節会等、依^レ旧之由有^レ詔。成忠作之（『日本紀略』安和元（九六八）年八月二十二日）⁽³⁾

五月が亡き村上天皇の忌月であることをもって、冷泉朝以降は実施していない⁽⁴⁾。しかし、節会としての儀礼は廃せられていたものの、従来の風習は存続している。右の「なまめかしきもの」に記す、天皇が親王・上達部に薬玉を下賜するのなどは、その一つである。

五月五日の節会は、四月二十八日の駒牽、五月五日に行う菖蒲草の献上・薬玉（統命縷・長命縷）の下賜・騎射・走馬、六日の走馬・騎射を主要な催事とする。節会の停廢以降は、個々の行事として、形を変えながら存続していた。この行事に用いる菖蒲草と薬玉は、季節の風物として人々の生活に浸透しており、愛好されていたのであった。本稿では、当時の行事における菖蒲草や薬玉に関わる問題について検討したい。

二

延喜十九（九一九）年、紀貫之は醍醐天皇の召しをこうむって、春宮保明親王の母である御息所藤原穗子の屏風絵のために、和歌を十二首詠んでいる。その中の「五月五日」と題のある歌は次のとおり。

あやめ草根長き命つげばこそ今日としなれば人の引くらめ⁽¹³¹⁾

あやめ草の根は長命を受け継いでいるので、五月五日になれば引くのだらうの意。あやめ草を長寿の草と見なす歌は、『貫之集』にはほかに、

五月雨に会ひくことはあやめ草根長き命あればなりけり⁽⁵⁰⁹⁾、「同五年亭子院御屏風の料に歌二十一首」。「同五年」は天慶五（九四二）年

菖蒲とれるところ、またかざせるもあり

あやめ草根長きとれば沢水の深き心は知りぬべらなり⁽²²⁷⁾延喜の御時、内裏御屏風の歌二十六首

五月あやめ草

五月てふ五月にあへるあやめ草むべも根長く生ひそめにけり⁽⁴⁰²⁾、「同年閏七月、右衛門督殿屏風の料十五首」。「同年」は天慶二年

年ごとに今日にし会へばあやめ草むべも根長く生ひそめにけり⁽⁵²⁸⁾、「同じ年四月の、内侍の屏風の歌十二首」。「同じ年」は天慶六年

とある。諸注において、これらの表現の典拠を示していないが、『荆楚歳時記』（五月）の、「以五綵系繫臂、名曰辟兵。令三人不病瘟」に付せられた杜公瞻の注、

按 孝経援神契曰、仲夏マユ蟄始出。婦人染練、咸有ニ作務。日月星辰、鳥獸之状、文繡金鏤、貢献所尊。一名長命縷、一名統命縷、一名辟兵縷、一名五色糸、一名朱索、名擬甚多。赤青白黒、以為四方、黃居中央、名曰變方。

の、「五綵系」つまり「長命縷」「統命縷」が、「根長き命つ（統）げばこそ」⁽¹³¹⁾・「根長き命あればなりけり」⁽⁵⁰⁹⁾のもとになったと言えよう。「五綵系」は、五色の糸の意であり、元来菖蒲（あ

やめ草」とは関連はない。ただ、ともに五月五日の風物であること、糸が長く垂れることと根の長いことが長命に繋がるとする共通点、後にも述べるように、「長命縷」「統命縷」は日本では「薬玉」と同一であり、「薬玉」は菖蒲を主な材料として作るなどから、「五綵糸（長命縷・統命縷）」を菖蒲の比喩とする歌が詠じられるのである。

貫之が歌人として活躍した時代には、五月の節会が催されており、⁽⁵⁾「統命縷（薬玉）」が下賜されていた。

女蔵人等、執「統命縷」^{（此間謂「薬玉」}、賜「皇太子以下参議以上」^{（女蔵人当「皇太子倚子、西面而立。皇太子起、至初謝座処、北面跪受。女蔵人跪授即還。次授親王以下。即随レ賜受取、下レ自「東面南階」、出「東南庭」。北上西面立定、皇太子佩之、拜舞着座。次親王以下、俱佩拜舞上レ殿）}（『内裏式』中・五月五日觀「馬射」式、『儀式』卷八・五月五日節儀）

女蔵人を通じて、天皇から皇太子以下参議以上の人々に「統命縷」が与えられている。五月五日に催す儀礼の一つとして、広く知れ渡っていたことであろう。『西宮記』（巻三・五月・供「菖蒲」）には、

賜「統命縷」^{（内侍執之、直度「御前」、当「太子倚子西南」立。太子起レ座、北面跪受。内侍跪授之。太子小拝立。内侍還入。女蔵人等又執之、進「御前東廂西面」列立。王卿以下一々進、共跪挿レ笏受。小拝左廻、下レ自「南面東階」、出「東南庭」一列}

（『西面北上』）。太子先佩^レ拜^レ着^レ座、懸^レ右肩、垂^レ左腋、即相^二分其緒^一結^レ腰、次王卿共佩^レ拜舞、畢復^レ座……。

とあって、『内裏式』『儀式』と次第や内容は変わりないが、皇太子に「統命縷」を授けるのが、「女蔵人」から「内侍」に代わっているところが異なる。これら儀式書には、そろって「統命縷」の語が見える。また、元慶七（八八三）年五月五日の節会では、折から来朝していた渤海使を喚んで、

賜「親王公卿統命縷」。伊勢守從五位上安倍朝臣興行、引^レ客就^レ座供^レ食。別勅賜「大使已下録事已上統命縷、品官已下菖蒲縷」^{（『三代実録』）}

と、親王公卿に加えて、渤海大使らにも統命縷を賜っている。この年は渤海国の使節が都にいたため、異例の記事が残ったのであり、ふだんも儀式的次第のつとめて、天皇から与えられていたはずである。儀式的模様や「統命縷」を下賜する意義を踏まえて、貫之は右の歌を詠じたのである。屏風絵に付せられた和歌を読む人も、さきの表現の由来を理解したことであろう。貫之以後において、

中納言の児におはしける時、薬玉を奉りたまふとて、女御の御

命をぞづくといふなるときなき袂にかかる今日のあやめは
（『公任集』69）
にも、「統命縷」を踏まえた表現が見える。このほか、
為親がはらからの為正、頭なり。五月五日に参りて、宮

の御前の遣水を、みかはの池となむ言ふなる、大盤所に
て

今年生ひのみかはの池のあやめ草長きためしに人の引かなむ

(『齋宮女御集』 128)

小一条殿の女御一宮生まれたまつて、三日の夜、五月五日に
なむありける

いはの上のあやめや千代を重ぬらむ今日も五月の五日と思へ

ば(『実方集』 283)

あやめ草なべてにまらず長き根の千代までかけんためしとは
見よ(『成通集』 90)

あやめ、人にかはりて

今日引ける君がよどののあやめ草長き八千代のためしなるら

ん(『江師集』 456)

永久四年四月、於鳥羽殿北面和歌ありしに、菖蒲

今日ごとに袂にかかるあやめ草千代の五月は君がまにまに

(『六条修理大夫集』 178)

などもまた、長生を願つて腕に掛けた「続命縷(長命縷)」を念
頭に置いて詠じたとと言えるであらう。

右に述べたとおり、「続命縷(長命縷)」は、「五綵糸」つまり

五色の糸であり(『荊楚歳時記』・五月)、平安初期の儀式書に、「女
藏人等、執・続命縷(此間謂・薬玉)(内裏式)・五月五日観・

馬射式・儀式・五月五日節儀」とあるように、「薬玉」とも
呼ばれていた。「続命縷」「薬玉」は、

蔵司 五月五日、続命縷料、糸五十鈞、紅花大三斤……(『延
喜式』卷十二・中務省)

凡五月五日薬玉料、昌蒲・艾(物盛一興)・雑花一捧(盛
盆居台)……(同卷四十五・左右近衛府)

昨日の雲かへす風うち吹きたれば、あやめの香、はやうかか
へていとをかし。簀子に助と二人あて、天下の木草を取り集
めて、「めづらかなる薬玉せむ」など言ひて、そそくりあた

るほどに(『蜻蛉日記』卷下・天延二(九七四)年五月五日)
今朝自「或所」給「薬玉一旒」作以「百草之花」、貫以「五色之
縷」……(『雲州往来』卷上・二十三往状)

と、「菖蒲(あやめ草)」がその素材の一部ではあるが、「菖蒲」
そのものではない。多くの草や花によつてできており、糸を垂ら
している。両者は異なるものである。しかし、右の『公任集』(69)

には、女御説子が定頼に贈った「薬玉」を、和歌では「あやめ」
と呼んでいる。ほかに、

五月五日、かたらふ人のもとより薬玉おこすとて

いつとても恋ひぬにはなし今日はいとどかくとばかりのあや

めにも見よ(『赤染衛門集』 309)

五月五日、家能卿のもとに薬玉をつかはすとて 内大臣

あやめ草ねたくも君は訪はぬかな今日は心にかかれと思ふに

(『金葉集』 127・夏。「内大臣」は源有仁)

若君の、播磨守俊綱のもとに渡りて、五月五日薬玉やり
たまふとて、菖蒲に書きつけられし

隠れ沿を忘れざらんあやめ草花の袂に今日かかるとぞ『経信集』(59)

などがあり、この言い換えはあり得たのである。⁽⁶⁾糸と根がともに長いという類似点があることから同一と見ているのであろう。また、薬玉があやめ草を中心の素材として作るものであったからかも知れない。

これに関連して、考えておくべきことがある。『内裏式』『儀式』によれば、五月の節会において、中務省が内薬司を、宮内省が典薬寮を率いて、それぞれ菖蒲草を献上する。この「菖蒲草」の実態については問題がある。この問題を取り上げるに当たって、まず菖蒲草献上に到るまでの模様を述べておく。

中務率^二内薬^一、宮内率^二典薬^一、昇^下盛^三菖蒲^机、自^二埒東馳道^一進、未^レ到^二埒東門^一八許丈留候。開司二人、経^二右近東陣南頭^一、分立埒西門南北掖。大舍人一人、進^二埒東門南辺^一、北面立叫^レ門。開司就^二版位^一、奏云、菖蒲草^{（此間謂^二漢女草^一）}進^{年止}。中務省官姓名等^{（謂^二輔以上^一）}叫^レ門故爾申。勅曰、令^レ申。開司伝宣。大舍人進、共称唯退出。両省率^二寮・司^一昇^下盛^三菖蒲^机置^二庭中^一。二省輔各一人留^レ机後、自余皆退出。頃之中務輔就^レ版。奏曰、中務省申々、内薬司乃供奉礼流。五月五日乃菖蒲草進^{来久乎}申賜久止申。訖退出。次宮内輔奏曰、宮内省奏々、典薬寮乃奉礼賀。五月五日乃人給乃菖蒲草進^{来久乎}申賜久止申^{（並無^二勅答^一）}。退出。開司還入、両近衛将曹各一人、率^二近衛各一人^一、令^レ開^二埒西門^一^{（通蹕之時已開。仍}

今開之。大臣喚^二内豎^二声^一。内豎^{（各着^二当色^一）}称唯、当^二左近東陣西^一立。大臣宣、喚^二内蔵寮^一、称唯出喚。允以上一人、入^二立前処^一。大臣宣、進^レ礼留菖蒲草収之。称唯退出、率^二寮舍人等^一、從^二大舍人幕北^一、経^二左近東陣南辺^一參入。各就^二机処^一、即^{ハサミ}拵^レ勿取^二菖蒲机^一退出^{（内裏式・五月五日觀^二馬射^一式）}

二つの省は、菖蒲を盛った机を武徳殿前の庭中に置き、両省の輔が、おのおの「内薬司乃供奉礼流、五月五日乃菖蒲草進^{来久乎}申賜久止申」「典薬寮乃奉礼賀、五月五日乃人給乃菖蒲草進^{来久乎}申賜久止申」と奏する。このあと大臣が「菖蒲草」の収受を命じ、内蔵寮の「允以上一人」が「寮舍人等」を率いて、菖蒲の机を取って退出する。その後、

女蔵人等、執^二統命縷^一^{（此間謂^二薬玉^一）}、賜^二皇太子以下參議以上^一^{（女蔵人当^二皇太子倚子^一、西面而立。皇太子起、至^二初謝座処^一、北面跪受。女蔵人跪授。即還次授^二親王以下^一。即隨^レ賜受取、下^レ自^二東面南階庭^一、出^二東南庭^一、北上西面立定、皇太子佩之、拜舞着座。次親王以下、俱佩拜舞上^レ殿^{（同右）}}と、武徳殿内において、「女蔵人」を通じて「皇太子以下參議以上」に「統命縷」を下賜する、といった次第へと進む。それではここに見える、献上された「菖蒲草」は、内蔵寮が引き取ってからどうなったのであろうか。『西宮記（菖蒲事）』には、「四日夜、主殿寮、内裏殿舍葺^二菖蒲^一^{（不見^二見^一式）}とあり、前夜に菖蒲を内裏に運び入れて殿舎の屋根に葺いている。節会においてさらに葺

蒲を献るのは、いかなる理由によるのだろうか。この「不見式」の「式」は『延喜式』。これに言及がないということは、その成立時には、内裏の殿舎に菖蒲を置く習俗が始まっていなかったことを示唆するのであろうか。そうであれば、「菖蒲草」の搬入は五月五日が最初といふことになる。ともあれ、何に用いるのかなどを、考えて見なければならぬ。宮内省が献上するのは、「人給の菖蒲草」である。天皇はこれをいつ皇太子や臣下に下賜するのか、儀式書の次第には見当たらない。また、天皇から賜る「続命縷」がいつ武徳殿にもたらされたのかについては、儀式書に述べるところがない。「人給の菖蒲草」と「続命縷」とは、何らかの関連があるのだろうか。このあたりの儀式の流れはどう理解すればよいのか、明らかにするべき問題が多い。次にこの点について述べることにする。

三

『延喜式』（巻十五・内蔵寮）を中心に、六衛府の薬玉の料献上から続命縷下賜に到るまでの儀式の流れを辿っていこう。同式には、「造五月五日菖蒲瑠所」と、五月の節会で用いる「菖蒲瑠」の素材として、支子・橡・黄蘗・紫草・茜などを挙げ、さらに製作に必要な材料を列挙している。このあと、

右料物送二系所造備 但件菖蒲瑠 供御并人給料外十五条
内暨為レ使供諸寺（東・西・梵釈……宝皇）。

と素材等を系所に搬送して、「菖蒲瑠」を造らせると記し、天皇

への献上ならびに人給の品とするほか、東寺・西寺以下の十五箇寺に一つずつ供えらるゝと、その使途を示している。この十五箇寺に供えるというのは、『西宮記』（菖蒲事）の「系所献薬玉二流（又差内暨送諸寺）」と対応する。製作するのは系所であり、諸寺へ送るのは内暨といふところが共通しているからである。これによれば、「菖蒲瑠」は「薬玉」ということになる。

さらに内蔵寮式には、

凡諸衛府所献菖蒲并雜彩時花、寮官率史生蔵部等、検收附二系所。

と、六衛府が献上した菖蒲や時花を、内蔵寮の官人が受け取って系所に渡すと規定している。言うところは、内蔵寮式の「右料物送二系所造備」と同じ。またこれは、左右近衛府式（巻四十五）の、凡五月五日薬玉料、菖蒲、艾（惣盛一興）、雑花十捧（盛盆居台）、三日平旦、申二内侍司、列二設南殿前（諸府准此）や、『西宮記』（菖蒲事）に、

三日、六府立二菖蒲興瓮花（各一荷花十捧）南庭（見近衛府式）也。先申二内侍。内蔵寮官人行事蔵人等、給二系所女官。

とあるのなどは、一連の職務についての定めである。五月三日早朝、六衛府が菖蒲・艾などの薬玉の料を、内侍を使って武徳殿前の南庭に列べる。そして内蔵寮（『西宮記』によれば、行事蔵人も）がこれを系所に送って薬玉を作らせる。ここまでは、先に引いた『内裏式』における、「菖蒲草」献上以前の「菖蒲瑠（薬玉）」製

作についての記事である。

内蔵寮式はさらに、

凡典藥寮所^レ獻^レ菖蒲并艾、奏進之後、寮允已下、參人撤之。

若官人已下不足者、召^レ加内醫。

と、五月五日武徳殿の前庭で典藥寮が菖蒲と艾を奏進した後、内蔵寮の官人らがこれを撤収すると規定している。また、典藥寮式（卷三十七）には、同じ内容について、

凡五月五日、進^二菖蒲生蔭^一（寮家充之。黒木案四脚（二脚

供御、二脚^ハ人給、並寮儲之）……省輔已下、寮頭已下、共執

入進、訖即退出。輔留奏之（詞見^二省式^一）……。

とあつて、宮内輔・典藥頭以下が「菖蒲生蔭」を進上してから、宮内輔がその場に留まって奏上するまでの次第を記している。『内裏式』『儀式』でも、宮内省とともに内蔵寮が「人給乃菖蒲草」を献ると述べている。その撤収についても、「各就^二机处^一、即措^レ笏取^二菖蒲机^一退出」（『内裏式』）したとあり、内蔵寮式に言う所と同じである。

右に見る奏進と撤収の後、菖蒲などはどうなるのであろうか。

この点については、春宮坊式（卷四十三）に、宮内省と典藥寮が武徳殿の前庭に「菖蒲案」を置いて退出した後のこととして、

主蔵官人舍人惣八人、入昇^レ案退出、附^二蔵人所^一。雑給料附^二坊官^一。

菖蒲を据えた机を移動して、蔵人所に渡し、「雑給料」を春宮坊の官人に託すとある。右の引用の前に、「典藥官人以下、昇^二供

料雑給料案各一脚、進立^二殿庭^一退出」とあるので、「供料」は「供御」の料であつて、蔵人所を経て天皇の手に渡る。「雑給料」とは「人給の菖蒲草」であらう。これを春宮坊の官人が受け取るのである。この菖蒲草には供御と人給の二種類がある（『内裏式』）。供御は天皇に献上し、人給はその名のとおり、天皇から臣下に賜う。供御の菖蒲草はこのあと天皇の元へ届けるのである。一方人給の菖蒲草は、いつ天皇が臣下に与えるかについては規定がない。『内裏式』『儀式』によれば、菖蒲を撤去した後、儀式は統命縷下賜へと移る。

女蔵人等、執^二統命縷^一（此間謂^二菖玉^一）、賜^二皇太子以下参議以上^一（『内裏式』『儀式』）

「統命縷」は、注にあるとおり「菖玉」のことである。これを女蔵人を介して皇太子以下参議以上に賜る。『西宮記』によれば、皇太子には内侍から、王卿には女蔵人から授けている。文字どおりの「人給ひ」である。この日の儀式において、「人給ひ」を行うのはこのみである。そこで思い当たるのは、『内裏式』『儀式』に記す記述である。

典藥寮乃奉^レ礼流、五月五日乃人給乃菖蒲草進^二案久乎申賜^一止申。

宮内輔が菖蒲草を献る時の詞である。「人給」、人に賜るとある。つまりこの「人給の菖蒲草」は、呼称は異なるものの「統命縷」として皇太子以下参議以上に下賜するのである。つまり、『内裏式』『儀式』・「典藥寮式」の「菖蒲（菖蒲草）」は、内蔵寮式の「菖蒲瓊」であり、「菖玉」でもあつて、そして「統命縷」のことだつ

たのである。

『内裏式』『儀式』によれば、中務省が内薬司を、宮内省が典薬寮を率いて、武徳殿の前庭に菖蒲草を置き、二省の輔が献上の口上を述べる。そして大臣の指示によって、内蔵寮の允が舎人らとともに菖蒲草の机を撤去する。次に両書では、武徳殿での続命纒賜与がつづく。続命纒つまりここの菖蒲草は、儀式書に記述はないものの、「春宮坊式」にあるとあり、蔵人所と春宮坊の官人らによって武徳殿の殿上に搬入されていたのである。

「薬玉」と「続命纒」とが同じものであることは、次の史料によっても明らかである。その前に、「薬玉」と「長命纒」が同じものであることを示す史料を引いておく。嘉祥二（八四九）年の五月節会に、折から来朝していた渤海使が召された。その時の詔が記録されている。

天皇我詔旨良万止宣布勅命乎、使人等聞給止宣久、五月五日尔薬玉乎佩天飲酒人波、命長久福在止奈毛聞食須。故是以薬玉賜比、御酒賜波久止宣。（『続日本後紀』）

仁明天皇は、五月五日に薬玉を帯びて酒を飲む人は、長命で幸いがあると聞いているので、薬玉と酒を賜うと下賜の理由を述べている。この年の五月節会における薬玉は、後に藤原衡卒伝にも次のように記している。

嘉祥二年春、渤海客入朝。五月五日、皇帝幸武徳殿、賜宴於賓客。有勅、扨侍臣之善辞令者、以為応対之中使。其日、賜長命纒佩之。使者賓客、歎其儀範。（『文徳実録』）

天安元（八五七）年十一月五日

同じ節会で賜るものは当然同一であり、一方では薬玉、もう一方では長命纒と呼んでいるのである。また、元慶七（八八三）年の五月節会にも、都に滞在していた渤海使が召された。騎射・貢馬を観覧した後の記事に次のように見える。

賜親王公卿続命纒。伊勢守従五位上安倍朝臣興行、引客就座供食。別勅賜大使已下録事以上続命纒。品官已下菖蒲纒。（『三代実録』）

「続命纒」は、五月五日に下賜されるので、右の薬玉・長命纒と同じである。⁽¹⁾記録する時期や状況の違いによって用いる語が異なっているのである。下賜されるものが変わっているのではない。

薬玉の製作から節会における下賜に到るまでの、諸司の職務の次第をまとめれば、次のとおりである。

- 1、五月三日の平旦、六衛府がそれぞれ薬玉の料（菖蒲・艾・雑花）を内侍を使って武徳殿の南庭に並べる。
- 2、これを内蔵寮が引き取り、糸所に送る。同じく他の官司もそれぞれの素材を搬送して、薬玉を作らせる。
- 3、五月五日、中務省と内薬司・宮内省と典薬寮が武徳殿前に参上し、両省の輔が糸所が製作した薬玉（供御と人給）を献ると奏上。これとは別に糸所は蔵人所と諸寺に薬玉を送っている。
- 4、内蔵寮が薬玉を撤収して、供御は蔵人所に、人給は春宮坊に渡す。

5、両官司は、薬玉を武徳殿内に運び入れる。

6、武徳殿で皇太子以下参議以上に薬玉を下賜

また、五月の節会の薬玉は、

ア、十五箇寺の供えるもの

イ、儀式の前に天皇が受け取り昼の御座に結びつけるもの⁽¹²⁾
ウ、儀式において天皇に奉るもの。これには供御と人給の二

種類があり、人給の方は工の薬玉となる。

エ、皇太子以下参議以上の人々に賜るもの

と、合わせて四種類がある。これらは時と場合によって呼称が異なるものの、すべて同一のものである。いずれも、諸官司が用意した素材を系所に移送し、そこで製作したものである。

ところで、同一の物品であるにもかかわらず、官司ごとにその呼び名が異なる。同じ物品になぜ複数の呼称があるだろうか。素材は、「五月五日続命縷料、糸五十絢、紅花大三斤」(中務省式)、「凡五月五日薬玉料、昌蒲・艾(惣盛一興)・雑花十捧(盛)盆居(台)〔左右近衛府式〕、造五月五日菖蒲佩所、支子一斗七升、橡一斗七升、黄蘗八斤、紫草五十斤、茜五十斤……」(内蔵寮式)と、各官司が分担して調達している⁽¹³⁾、これを用いて系所が製作したものを、儀式の場で奏進する際には「菖蒲草」、下賜する時には「続命縷(薬玉)」と呼んでいる。一つの物品に種々の呼び名があるのは、何とも紛らわしい。官司ごとに呼称があつて、統一は容易ではなかったのかも知れない。諸司独自の呼び名が協調することなく保持されていたのである。

四

さきに和歌において、薬玉をあやめ草と同一のものとして詠じていると述べた。その背景には、右に述べたような、儀式書等の記述に基づく知識があつたのではあるまいか。儀式書を知る人や儀式に携わる官人らには、この表現は納得できたはずである。その節会を行った武徳殿の前庭には、競馬や薬玉下賜を見物する人々がいた。『蜻蛉日記』(康保三〔九六六〕年五月)には、この年久々に節会が催されというので騒ぎになっていたと言う。作者は見たいと思うものの、見物する席がない。それを夫藤原兼家が用意してくれて、「宮の御棧敷の一つづきにて、二間ありけるを分けて、めでたうしつらひて見せつ」、思いがかったとある。また、『枕草子』には、すでに停廃していた節会の模様に触れて、「もとの有様、所々の御棧敷どもに、菖蒲葺き渡し、よろづの人も菖蒲がづらして」(見物は)と、観覧用に棧敷があつたと記している。この場にいた人々は、薬玉の殿庭への搬入・献上、武徳殿内での下賜を目の当たりにして、薬玉が「菖蒲草」とも呼ばれているのを知つたであらう。薬玉を奏進する折りの、

中務省申々、内薬司乃供奉礼流、五月五日乃菖蒲草進薬久乎申賜
久止申。

宮内省奏々、典薬寮乃奉礼流、五月五日乃人給乃菖蒲草進薬久乎
申賜久止申。(『内裏式』・五月五日観馬射一式)

という言い換えは、観衆を介して徐々に外部へ広がるものでもあ

ろう。晴儀での呼称は普及しやすと思われる。

それに、『枕草子』では、

五月の節のあやめの蔵人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを、領布、裙帯などして、薬玉、親王たち上達部の立ち並みたまへるに奉れる、いみじうなまめかし（なまめかしきもの）

よろづの人とも菖蒲のかづらして、あやめの蔵人、かたちよきが限り選りて出だされて、薬玉たまはすれば、拝して腰に付けなどしけんほど、いかなりけん（見物は）

と、親王・上達部に薬玉を賜う役割の女性を「あやめの蔵人」と呼んでいる。一方儀式書には、「女蔵人等、執『続命縷』（此間謂「薬玉」）、賜「皇太子以下参議以上」（『内裏式』『儀式』）とあり、「女蔵人」のことである（『西宮記』では、皇太子に与えるのは「内侍」とある）。儀式の場集う人々はことごとく「菖蒲のかづら」を付けており、「あやめの蔵人」は、女蔵人の特徴を際立たせる別称ではないようだが、「菖蒲草」が薬玉の異称であることがこの呼び名を生んだのであろう。あやめ草が薬玉の重要な素材であることが、この言い換えの背景にある。儀式・儀式書における呼称、薬玉を下賜する女官の別称、和歌における言い換えなどは、「菖蒲草」が儀式における中心に位置していたことをよく伺わせる。

五

五月の節会は、四月二十八日の駒牽に始まり、五月五日の薬玉

献上・賜与と騎射・走馬、六日の走馬・騎射へとつづく。このほか奏楽・雑芸・供饌が挟み込まれるものの、右が主要な行事である。薬玉に関する行事は、一連の儀式にあつて異質と言えよう。

馬芸・武芸などの激しく勇壮な催しに対して、色鮮やかな薬玉の献上と下賜という優美な一齣は際立って映る。走馬・騎射が武威を示そうとする催しであるのに対して、薬玉を皇太子以下の人々に賜うのは、患災・長命を期してのことである。こゝは、天皇が臣下の安寧・長生を図るうとして、恩沢を施す場面なのである。武徳殿内で、皇太子・親王さらに参議らが跪いて薬玉を拝受し、殿庭へ降りてそれを帯び、謝意を表するべく拝舞する。この儀式の流れは、天皇の徳が人々に及んでいること、天皇のもとに築かれた身分秩序を、参会する人々に、毎年同じように認識させる政事そのものであった。内裏の殿舎に暮らした菖蒲、どの人も付けた菖蒲縵、薬玉の献上と下賜、そして佩帯・拝舞、そのあやめ草の青さと芳香、これまた香りを放つ彩り豊かな薬玉は、儀式全体を華やかに装飾していると言えよう。

〔注〕

- (1) 五月五日の行事については、倉林正次「五月五日節」、『饗宴の研究 文学編』所収、山中裕「平安朝の年中行事」、同「『枕草子』と五月五日」、『風俗史学』第十一号、後藤祥子「五月五日」〔山中裕・今井源衛編『年中行事の文芸学』〕所収、中村喬「端午節における飾物の系譜」〔『中国歳時

史の研究』所収、同「五月五日」(『中国の年中行事』所収、大日向克己「五月五日節」律令国家と弓馬の儀礼」)(『古代国家と年中行事』所収)などの先行研究がある。

(2) 『宇津保物語』(内侍のかみ)に、節会についての好尚を描いた箇所がある。帝と東宮の御前に親王・上達部らが参上した折り、東宮から、「年の内に出て来る節会の中に、いづれいとせちに労ある、定め申されよ」と、最も情趣に富む節会はどれかという下問があった。これに対して、源正頼は、朝拝・内宴・三月節会・七夕・九月節会を挙げ、中、「あやしくなまめきてあはれに思ほゆるは、五月五日なむある」と述べ、晝にほととぎすが鳴き、五月雨の降る早朝に軒に簀いた菖蒲が香るのは、「あやしく興まさりて思ほゆる」と答える。そして帝は、「いとよつ定めたまふなり。思ひしことなり。さらに年の内の節会見るに、五月五日にます節なしとなむ思ふ」と同意する。貴顕が五月節会を愛好していたことをよく伝えるやり取りである。また、ここからは節会を政事として重んじるよりも、風情ある行事として楽しもうとする傾向が見て取れるであろう。

(3) 「右大臣」は藤原師尹、「成忠」は高階成忠。村上天皇の崩御については、

依_レ天皇不_レ予、詔大_ニ赦天下。但常赦所不免者不_レ赦。
已刻天皇崩_ニ于清涼殿。春秋卅二。在位廿一年」(『日本
本紀略』康保四年五月二十五日)

とある。また、『政事要略』(巻二十四・九月節会事)に、成忠が書いた冷泉天皇の詔があり、

五月者、先帝昇遐之月也。端午之遊、縦在_ニ閏武、胤子之思、何同臨之。五月之節、一切之吏、尋_ニ良辰而設_レ宴、託_ニ美景而命_レ觴

と、父村上天皇の崩じた月に、騎射や走馬などの武技は観閲できないと、子としての心情を述べている。

(4) 『日本紀略』の寛和二(九八六)年五月二十六日に、「天皇行幸武徳殿。有_ニ節会」とある。武徳殿での節会であるから、五月の節会であろう。ただ、なぜこの日に催したのかは分からない。

(5) 延喜年間における五月節会の開催状況を、『日本紀略』で見ると次のとおり。

二年 御_ニ武徳殿、駒牽(三日)、節会(五日)
六年 天皇幸_ニ武徳殿(五日)、又幸(六日)。
七年 無_ニ節会(五日)

十年 天皇御_ニ武徳殿、節会如_ニ常(五日)、又幸_ニ同殿(六日)

十二年 節会(五日)

十六年 無_ニ節会(五日)

十七年 天皇幸_ニ武徳殿、有_ニ駒引事(四月二十八日)、
天皇幸_ニ武徳殿(五日)、又幸_ニ武徳殿(六日)
(6) もちろん薬玉をあやめと言い換えるだけではなく、赤染

衛門詠のような、ものごとの文目・筋道・条理の意である「あやめ」を掛けている和歌も多い。

- (7) 『内裏式』では、内蔵寮の允以上の一人が「寮の舎人等」を率いるのに対して、『儀式』では、「蔵部等」を率いるとある。

- (8) 「人給」とは、高位にある者・主君が下位の人々・臣下に物品等をあたえること。二十卷本『和名類聚抄』(巻十一・車類)に、「副車 漢書注云、副車(曾閉久流萬。俗云、比度大萬比)、後乗也」とあるように、主人の後に付き従う車の意であることが多い。

早朝参_レ殿 亥時姫君入内(乗_二金作車_一)。人給車十両(『小右記』永観二(九八四)年十二月十五日)

所もなく立ち重なりたるに、よき所の御車、人給ひ引きつぎて多く来るを、いづこに立たむとすらむ(『枕草子』・よろづの事よりも)

方々のひとだまひ、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束ありさま言へばさらなり(『源氏物語』・若菜下)

は、その例であり、随従する人々の乗る車である。『小右記』の例は、入内する藤原頼忠女説子に従う供の者が乗るために、朝廷から供せられた車であり、これが本来の意味のようである。

いかで人給ひならむ御几帳たまはらむ。にはかに里へ

取りにつかはすがなむ(『宇津保物語』・内侍のかみ)

内裏・宇多院 有_二御養事_一。……又御膳物・人給食各巨多(『御産部類記』・「朱雀院」所引「貞信公記」延長元(九二三)年八月一日)

は、車以外についての例。前者は几帳の借用を依頼しているようであり、所有者が貸す行為を、借りる側が「人給ひ」と敬意を込めて表現したのである。後者は、醍醐天皇と宇多院が主催する産養に参上した臣下らに振る舞われた饗膳であり、「人給乃菖蒲草」(『内裏式』)とは、臣下に与える点では同じである。この用法での「人給」はあまりないようである。

- (9) 「珮」は、観智院本『類聚名義抄』(法中)に「オムモノ」の訓がある。「珮」は、帶玉、身に付けるの意。

- (10) 系所については、所京子「所」の成立と展開(『平安朝「所・後院・俗別当」の研究』所収)参照。

- (11) 『荆楚歲時記』(五月)には、「以_二五綵糸繫_レ臂、名曰_二辟兵_一。令_二人不_レ病_レ瘟_一」とあり、「五綵糸」に対して杜公瞻の注には、「一名長命縷、一名統命縷」とあり、この二つが同じものであることが分かる。史書の記者たちも知るころであつたであらう。

- (12) 『西宮記』に、「系所献_二薬玉二流_一(又差_二内豎_一送_二諸寺_一)。藏人取之、結_二付昼御座母屋南北柱_一」とある。なお、『内裏式』『儀式』にはこの記述がない。平安時代初期に

はこの習わしはまだなかったのかも知れない。

(13) 「薬玉」製作のために各官司が用意する素材には、厳密な規定があった。これに対して、『蜻蛉日記』には、

簀子に助と二人あて、天下の本草を取り集めて「めづらかなる薬玉せむ」など言ひて、そそくりゐたるほどに（天延二年五月）

とあつて、一般には薬玉の素材に細かな決まりはなかったようである。

(14) 喜田新六「王朝の儀式の源流とその意義」（『令制下における君臣上下の秩序について』所収）参照。